

人間ドック腹部超音波検査における膀胱癌の成績

◎松島 朱里¹⁾、成澤 友紀¹⁾、北條 敏彦¹⁾、廣瀬 和美¹⁾、齋藤 晴義¹⁾
聖隷予防検診センター¹⁾

【目的】人間ドックで実施する腹部超音波検査は各種がんの早期発見を目的の一つとしており、当センターでは肝臓・胆道・膵臓・脾臓・腎臓・腹部大動脈に加え、膀胱の観察も行っている。

今回、人間ドック腹部超音波検査における臓器別の成績の比較を行ったため報告する。

【対象および方法】2018年4月1日から2020年3月31日までの2年間に当センター人間ドックで腹部超音波検査を実施した男性23,498名（平均年齢55.3歳±11.8歳）、女性16,836名（平均年齢53.3歳±11.9歳）、合計37,334名を対象とした。癌の可能性が否定できず、精密検査が必要な者（MRIまたはCTを施行もしくは各専門医に紹介）を要精密検査者とし、臓器別にて要精密検査者、2次精密受診者、癌診断数を調べ、比較を行った。

【結果】各部位の①要精密検査者、②癌発見数、③要精密癌発見率（癌診断数/要精密検査者）は、肝臓で①365名、②1名③0.3%、胆管・胆嚢は①113名、②4名③4.2%、膵臓は①260名、②6名、③2.5%、腎臓は①181名、②10名、

③6.1%、膀胱は①32名、②8名、③27.6%であった。全体受診者における癌発見率は肝臓癌0.003%、胆嚢癌0.01%、膵臓癌0.016%、腎臓癌0.027%、膀胱癌0.021%であった。

【結論】膀胱は他の臓器と比べ要精密検査者数が少ないが、要精密癌発見率が高値であり、効率の良い検査がされていた。また、「腹部超音波検診判定マニュアル（2021年度版）」では下腹部の観察は必須となっていないが、今回発見された膀胱癌の多くは早期癌であり、多くの場合で血尿などの症状が陰性であったため、人間ドックで行う腹部超音波検査として他臓器に加えて膀胱まで観察することは有効であると考えられる。

今後、人間ドック以外の検診においても膀胱癌の危険因子である有機溶剤を使用している事業所や、喫煙歴のある利用者へ腹部超音波検査実施を勧め、がんの早期発見に尽力していきたい。

連絡先：053-439-1114